

中国・壮族の春節

中国広西壮族自治区の壮族の異なる地域で、一九九九年と二〇〇九年に二回、春節を過ごしたことがある。両者の比較を通じて、この一〇年間で何が変わり、何が変わらなかったのかをみることにする。

靖西県と田陽県

一九九九年に過ごした靖西県はベトナムとの国境に近く貧困県として有名であるが、二〇〇九年に過ごした田陽県は右江（珠江の最上流）の河谷平野に開けた穀倉地帯で、現在は稲のほかトマト・四季豆・青瓜などの野菜やマンゴーなど亜熱帯の果物の一大産地として富裕な地域である。旧暦二二月三〇日の除夜に年越しの準備がおこなわれる。県庁所在地の街の市場では、年越しに必要な食材・用品が売られており、購買客で賑わう。生きたニワトリをかごにいられたもの、豚肉、魚（内陸部では淡水魚のティラピアが好まれる）、果物、野菜、そして線香、紙銭、ろうそく、花火、

爆竹など。めでたい文字を対句で書いた春聯の実演販売もある。

肉料理尽くし

靖西では除夜の数日前に農家で豚を一頭殺して、燻製「臘肉」や自家製ソーセージを作った。臘肉とは豚肉の塊を細長く切って数日間塩漬けにし、それをイロリの煙でいぶしたもので、食べるときに切りわけて炒めて食べる。ソーセージは豚の腸に自家製の豚のひき肉をつめたもの。田陽ではそれらを自分で作らずに市場で購入している。しかし、靖西同様、ニワトリやアヒルを数羽殺した。春節は内陸部では肉料理尽くしの御馳走を食べるのである。除夜の夕食には、鶏

肉・ソーセージ・豆腐・春雨・野菜などのたっぷり入った鍋、蒸した鶏肉「白切鶏」、チャーシュー、魚の蒸し籠掛け、アヒルのぶつ切り炒めなどが卓上に所狭しとならぶ。鍋はかつては中央の空洞部分に炭火を入れる形式だったが、今は電熱式だ。まだ農村では度数の低い焼酎が好まれるが、最近では瓶ビールも多く飲まれる。

若者が里帰り

沿海部に出稼ぎに行っていた若者がこのときに里帰りをする。留守を守る老人や小さな子どもで普段はひっそりしている農村がこのときには活気づく。若者は家電や子どもの玩具などの土産をたくさんもって帰省

する。子どもたちは、正月用の菓子詰め合わせをかかえて、土産のラジコンなどにあちこちで歓声を挙げる。田陽で宿泊した家では大学生で寄宿舎住まいをしている息子が帰省してきた。除夜には主婦が芭蕉の葉でモチゴメを包んだ大きなチマキを作る。餡はアズキ餡・緑豆餡など。日本のような搗きモチは見かけなかったが、広西でも他地域にはある。

除夜の風物詩

初一（一月一日）は料理をすることができないとされているので、前日に作りおきをする。初一は家内を掃除することもできないし、理髪、爪切りをはじめハサミ類を使用することもできない。若い旅行者は知り合いの家で食事がありつくことになる。正月という「お年玉」がつきものだが、中国の場合、子どものみならず老人にも与えるので、老人に聞き取りをする際に渡さなければならぬ。

変わるくらし

さて、変化したものはビルが並ぶ農村の景観のみだけではない。白黒テレビは大型のカラーテレビになった。冷蔵庫・洗濯機も徐々に普及し始めており、農民もごく普通に携帯電話をもつようになった。乗り物はかつては自転車だったが、今は若者がオートバイを乗りまわす。市場・商店では商品があふれかえっている。少なくとも内陸部でもこの一〇年ほどのあいだで物質的には格段に豊かになったといえる。今のところ、正月の伝統的な行事は大きくは変化していない。しかし、田陽で泊まった家では息子がパソコンをもっていた。一人っ子ゆえ両親は何でも子どもに買い与えているようだ。県庁所在地の街に出るとネットカフェが数軒あり、高校生くらいの若者で満席になる。パソコンのゲームに浸かって学業がおろそかになるケースも最近問題になっている。何ひとつ不由なく育てられたこうした子どもたちが親になるころには正月はどう変化していくのであろうか。



除夜の夕方、供物をそなえ村の廟に詣で人畜の安全や豊作を報告する(田陽県)

ない。調理したニワトリなどの供物をかごやざるに盛って線香を用意して村内の廟に参るのも除夜の風物詩のひとつだ。田陽では観音など仏教系の廟や関帝・伏波など歴史的人物を祀った廟など村によって廟が異なるが、壮族の人びとは廟の種類・神の来歴にこだわらない。靖西では土地廟を祀っていた。祭りに行くのはほとんどが女性で、この点が漢族と異なるようである。廟のほか家の祭壇にも線香を焚いて供物をささげる。夜になると国民的番組ともいえるテレビ番組の『春節聯歡晚会』を見ながら御馳走を食べ、一家が団欒をする。一段落すると春聯の貼り替えにとりかかる。正面玄関、裏口、家畜小屋と貼って回る。深夜近くになると連発式の爆竹を玄関の外で放ち、花火を打ち上げる。子どもたちも花火に興じる。一九九〇年代では靖西では木造の高床式住居が主流だったが、二〇〇〇年代に入り、数年間の出稼ぎを経て資金を貯めた若者たちが競うように故郷に二、三階建のビルを建て始めた。ビルの屋上から放つ花火は賑やかで、年々盛大になっている。田陽では花火が終わり日が改まると廟参りに出かける。初詣である。初二（二月二日）になると嫁いだ娘が里帰りし、親戚の年始訪問が始まる。そのころには街では獅子舞や龍舞が催される。食堂は正月になると店じまいをするので、外から来た我々の